

## 平成 26 年度第 3 回大阪府都市計画審議会常務委員会

日時：平成 26 年 12 月 18 日（木）午後 3 時 30 分～午後 5 時

場所：ホテルプリムローズ大阪 「鳳凰（西）」

- 3 層の都市構造で都市機能がこのエリアにどの程度整備されているのか何らかの形で評価することは、どこか 1 か所に機能を集積させて、高次都市機能をもった 1 つの中心を作るという意味ではないことがよく理解できる。
- 一方、大阪は都市機能が密な反面、人も多く、災害時の病院のキャパシティや緊急医療の機能とかショッピングセンターに対するアクセス性など、いくつかの視点で評価し、そのような評価軸をもって検証していくことが必要。
- 災害時にどこかの経路が切れたり、拠点がダウンした時に、致命的なところがないか想定して、経路で言えばバイパス機能、拠点であればバックアップをどの様に立地させていくのかということのシミュレーションも必要。
- 都市構造を 3 層でとらえることが明確に出ているが、例えば、「道路空間の再配分」や「都市の質的な転換」のように、記載されていないものの取舍選択をあえてしているのかどうか。市町村の仕事や、道路の渋滞解消など、すでに必要性があってもやらなければいけない事業を書くのかどうか。
- 機能の再配置や広域生活圏の維持を実現するための道路ネットワーク整備など、3 層構造の話の中で少し展開したほうがいいのではないかと。あえてメリハリをつけているのであれば構わないし、少し漏れがないかというチェックが必要。
- 「都市と自然の近接性」は、2 つの近接性があり、日常生活圏での近接性と、大阪は海から平野部があって、丘陵地、台地があって、すぐに山系があるコンパクトな構造になっている。都市構造をとらえるにあたって、基盤となっている自然構造なども見えるようにすべき。
- 自然及び屋外レクリエーションも都市機能として重要で、大阪都市圏では特定公園が自然レクリエーションの機能を発揮し、高次都市機能では大規模公園、広域生活圏では都市基幹公園などが役割分担しながら、運動や余暇を担保しており、都市機能の例としてこれらの記載が必要。
- 今までの都市計画はブレイクダウン型で、最初に都市の中核を決め、その圏域の中に住宅など、いろいろな機能を配分していく考え方がオーソドックスな考え方だった。
- 大阪都市圏は成熟した都市圏であり、物的資産は空間に稠密に張りついている。ただ、人口が減ってくる地域もあり、知らないうちに過疎とかが起こるところもある。
- 広域生活圏の図は、大阪府の任意の 1 点に仮に住むとして、その地点から 30 分で広域生活圏の機能が、1 時間でどのような機能が、それを地点地点で評価する発想である。
- それを網羅的にやると、どこかにやはり活動のほころびだとか、広域生活圏であれば福祉のほころびのようなことが出てくる。高次都市機能であれば、ほかに住んでいる人と比べて自分のところを評価する見方をしようとしている。
- 穴があったらその穴をどうするかを個別に議論していかないといけない。中核にいろいろな施設を集める発想ではなく、その生活圏を支えるような活動は 30 分圏内に散らばらせていこう。それで確保できるかどうか、コンビニがあるか、近くにお医者さんがいるか、そのようなことで評価していこうという視点が大阪型のコンパクトシティのイメージ。これが成熟した都市圏のコン

パクトシティの考え方なのだとということ。

- この発想で詳細な検討をこれから進めていったときに、都市計画のPDCAサイクルを回していく中で、それを実現していき、時間をかけて理解していただくことが必要。
- この発想に立つと、今問題になっているダイバーシティ、いろいろな多様な生き方の人がそれぞれのところでどのように生きていけるかという評価ができる。
- ただ、大阪府全体がそのような条件を備える必要もない。拠点性等メリハリをつけていけばよい。実践を通じて、少しずつ理解をしていただくしかない。
- 1つ1つの項目ではなく、そこで生活する以上パッケージとして実際の多様化した家庭のニーズがマッチングできているかどうかを視点ごとで評価していくということである。
- 評価した後のことだが、例えば、人口が減っていて、このエリアはとてもしんどいという場合に、対策をやればできないことはないが縮退するという選択もあれば、やはり施設の再配置をするものもあれば、ネットワークの強化をしないといけないという対策もある、そのような展開になる。
- 広域生活圏にある「固定された圏域を設定するものではなく、市街化区域の立地で都市機能を確保」。ここはもう少し補足したほうがよい。機能を享受できるようにしたいけれど、できないところはどうするのか、縮退の方向とかその政策論を考えていくための1つのスタート点である。
- コンパクトシティとの大きな違いは、都市が小さくなっていく中で、いかに都市活動・都市機能を維持していくかという発想が国土交通省のタイプである。大阪都市圏でも都市活動の維持は同じで、個別に見ればいろいろあるが、トータルで見ればそこまではならず、従来型の発想では考えないほうがよい。そのようなことを都市づくりの基本的な考え方に入れたほうがよい。
- 高次都市機能の説明図は、1時間圏で皆が自分の目的に応じた選択が確保されている図でないといけない。高次都市機能の集積度合いの図ではだめではないか。
- 例えば、今の図で、ここに住んでいるとしてそれぞれ圏域がずれているということを事例として1つ載せてしまって1時間でこれだけいけると示す方法もある。
- 「都市づくりの基本的な考え方」の書きぶりをもう少し工夫して、「発想の転換」があるのだということがわかるように、はっきり書いたほうがよい。
- 例えば、「中心点を決めて、その中心点にどの程度都市機能が集積しているのかという観点からではなく、その多様なニーズをもつ世帯を中心に都市を見たときにその一定範囲にどの程度の都市機能が提供されているのかという観点からどのぐらいのトリップでその機能までアクセスできるのかをサービスを受ける居住者の側からネットワークを見るような見方に変える必要がある」と視点が変わったのだということを書いて、サンプルとして、この世帯から見たら、この範囲にこれだけ病院があって緑にもこのぐらいでアクセスできてということがあり、それを全体でレベルアップしていく方向で考えるということを書いたほうがわかりやすい。
- 考え方を大きく変えたというメッセージがどこかにないと、変わったこと自体が伝わらない可能性がある。例えば、「大阪府の都市計画のあり方について」とあるが、これに少し新しい概念として、成熟期であることや活力とか質を高めることが重要だというキーワードを入れたサブタイトルを付けてはどうか。
- 形容詞として人口減少時代とか、多様化社会とか、いろいろな言葉が作られている。ある意味でこれからアジアのいろいろな国もそのようになっていくだろう。
- 圏域の選択の多様性のようなことがキーワードになってくるだろう。